



＜教育目標＞

- 思いやりのある子ども
- 進んでやりぬく子ども
- じょうぶな子ども
- よく考える子ども

令和2年1月8日(水)
 練馬区立豊玉第二小学校
 校長 永井 美奈子

豊二小だより 1月号

これからの時代を生き抜くために必要な読解力

校長 永井 美奈子

あけましておめでとうございます。新しい年の始まりにあたり、皆様方の御健康と御発展を心よりお祈り申し上げます。

今年の干支は十二支で言うところの子年にあたりますが、正確には、「庚子（かのえね）」と言うそうです。子年は新しい物事の始まりを意味し、植物に例えると成長に向かって種子が膨らみ始める時期とのこと。庚には、今までのことを踏まえて改めるという意味があるそうです。いよいよ今年は、東京オリンピック・パラリンピックの開催や新学習指導要領の完全実施、そして、本校にとっては、開校80周年を迎える大きな節目の年となります。ICT 機器を活用した授業改善やプログラミング教育などの新しい教育課題にも挑戦していかなくてはなりません。未来への大いなる可能性を感じさせるこの年に、長期的な展望をもってしっかりと計画し、変化を恐れず、新しいことにチャレンジしていきたいと思います。



さて、昨年12月に、OECD(経済協力開発機構)の生徒の学習到達度調査2018調査結果(PISA2018)が公表されました。PISAとは、義務教育終了段階の15歳を対象に、読解力、数学的応用力、科学的応用力を測るものです。2000年から3年ごとの実施で、2018年調査は読解力を重点として世界79か国・地域で実施されました。文部科学省の発表では、日本の数学的応用力と科学的応用力は、「引き続き世界トップレベル」としています。一方で読解力については、日本の読解力の平均点はOECD加盟国平均を上回ってはいるものの、前回調査の2015年より12点、順位も8位から15位に低下しました。特に自由記述形式の問題で、自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明することに課題がみられたそうです。2015年からコンピュータ使用型調査に移行したため、日本の子供たちがデジタルテキストに不慣れであることが原因との分析もありますが、「文章を読み取る力」や「書く力」の育成は、以前から教育現場で課題とされてきたことです。本校においても、読み取る力や書く力について同様の傾向がみられます。(詳細は学校だより11月号に掲載)

人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトディレクターで、国立情報学研究所教授の新井紀子さんも、著書「AI VS 教科書が読めない子どもたち」において、子供たちの読解力の不足を指摘しています。そして、AIと共存せざるを得ないこれからの社会を生き抜いていくためには、AIが苦手とする読解力を身に付け、AIに代替されない仕事に従事できるような能力を備えることが大切だと述べています。知識量や正解までの速さを競うような学力ではなく、読解力を基盤としたコミュニケーション能力や理解力を身に付けることが重要です。

次代を担う子供たちが、夢や希望をもち、自らの道を切り拓いていく力を培うために、教職員一同、心をつなげて教育活動を進めてまいります。どうぞ、豊玉第二小学校の教育活動に一層の御理解と御協力をいただきますようお願い申し上げます。